



Data

監督・原案・脚色：
ジャン・ルノワール

出演：イングリッド・バーグマン/
ジャン・マレー/メル・フェ
ーラー/ジャン・リシャル
ノマリ・ノエル/ピエ
ール・ベルタン

■ショートコメント■

◆私にとってイングリッド・バーグマンという女優は、スペインのフランコ軍事独裁政権に抵抗するゲリラ部隊の娘マリア役を演じた『誰が為に鐘は鳴る』(43年)の印象が強かったから、「美貌の公女エレナが巻き起こす恋愛喜劇の名作」と謳われている本作の鑑賞には少し違和感があった。しかし、①4月27日に観た『大いなる幻影』(37年)のジャン・ルノワール監督作品であること、②『戦争と平和』(56年)でオードリー・ヘップバーンと共演したメル・フェラーが出演していること、の2点から映画館へ。

◆20世紀初めに举行された、パリでの革命記念日の賑わいはすごい。本作冒頭ではその賑わいぶりが実感できるが、そもそもその日のメインスターである国民的英雄・ロラン將軍とは一体誰？私にはそれがサッパリ分からないが、「人生は祝祭！よき時代 ベル・エポックのパリ」たる本作では、そんな歴史的考察は不要・・・？

『ローマの休日』では、オードリー・ヘップバーン扮する某国の王女・アンは表敬訪問のためにイタリアのローマを訪れていたが、本作でイングリッド・バーグマンが演じるポーランドの美貌の公女・エレナがなぜフランスのパリに来て、革命記念日の雑踏の中に1人で行っていったのかについても、同じ理由によって歴史的考察は不要だ。もっとも、ロラン將軍(ジャン・マレー)を一目見るため、エレナを馬車に乗せたのは、ひょっとしてエレナの夫になるかもしれない男・マルタン＝ミシヨ(ピエール・ベルタン)だったが、さて本作に見るエレナの恋の展開は・・・？

◆雑踏の中でエレナがいかにも紳士然としたアンリ伯爵(メル・フェラー)と出会い、ロラン將軍の親友だと言うアンリ伯爵の案内によってエレナがロラン將軍と出会うまでの

導入部は、なるほど、うまい展開。そして、これによって、実はお家が貧乏状態に陥っているエレナの結婚相手選びの候補者が、①富豪の靴製造業者であるマルタン、②ロラン將軍、③アンリ伯爵の3人になるわけだ。しかして、エレナは①カネ（マルタン）、②権力（ロラン將軍）、③容姿、ハンサムさ（アンリ伯爵）のどれを選ぶのだろうか？

◆そう見ていると、下手すれば、今どきのアホバカバラエティと同じような軽薄な展開になっていくのでは、との心配も少しあったが、いやいや、ジャン・ルノワール監督作品でそんなことはあり得ない。

各シーンでドタバタ喜劇的な展開が見えるのはご愛嬌で、マルタンがカネの力にモノを言わせてエレナを口説こうと真剣なら、出会ったばかりのロラン將軍もアンリ伯爵もエレナに一目惚れだから、それぞれ真剣。とりわけ、エレナから幸運のヒナギクを受け取ったことによって陸軍大臣のご指名を受けたロラン將軍は、ヒナギクの効用を本気で信じ始めたから、それまでの恋人を捨ててしまうほどの勢いだ。スマートさや姿形からすればやはりアンリ伯爵が一番だが、ロラン將軍の男ぶりも相当なもの。しかし、やっぱりロラン將軍は武人、公人としてのしんどさもあるから、ユーモアに富み、自由な人生を楽しむならアンリ伯爵か？

このように、エレナの心は夫選びに揺れに揺れたようだが・・・？

◆今開催されているパリの革命記念日は、第1次世界大戦（1914-18年）より前だが、当時のヨーロッパの2大強国であったフランスとドイツの対立はすごかったらしい。そのため、本作中盤で少しユーモアを含めて描かれる「ヴィドバン事件」は、ホントは緊張感を深めたい。これは、フランスの軍用監視気球がドイツに落下し、乗っていたヴィドバン大尉が捕虜になった事件だが、私はその内容を全く知らなかったのは勉強不足と言わざるを得ない。ドイツ軍の捕虜にされたヴィドバン大尉が無事解放されたのは幸いだが、それはきっと関係者の努力のおかげだ。

しかし、本作によれば、その時、フランスで起きたヴィドバン大尉を奪還せよとの世論に乗って、ロラン將軍擁立グループは、ロラン將軍を大統領に就かせようと狙ったらしい。そして、そこでロラン將軍説得のために利用しようとしたのがエレナだ。ロラン將軍が夢中になっているエレナの説得なら、ロラン將軍はそれに乗るはず。そんな思惑だったが、さて・・・？

本作は単にエレナとマルタン、ロラン將軍、アンリ伯爵という3人の男をめぐる恋愛劇だけではなく、そんな当時の大切な問題点も描かれるので、それにも注目したい。

◆フランスはナポレオンの抬頭と皇帝への就任、それによるヨーロッパの制覇が自慢だが、1812年のロシア遠征に失敗したナポレオンはその後衰退していくことに。そして、1

度はエルバ島からの脱出を果たし、再び帝位に就いたものの、ワーテルローの戦いで敗北したナポレオンは結局「百日天下」に終わり、その後二度と立ち上がれなかった。今、国民の熱狂的支持を受けて陸軍大臣になっているロラン将軍には、次の大統領の座まで狙う道もあったようだが、さて、そんなナポレオンの例をよく知っている彼の選択は・・・？

本作では“街角の歌姫”が唄う「パリにご用心」の歌がポイントごとによく効いているのでそれに注目！また、本作ラストでは、地方に逃げ込んで今後の戦略を練るロラン将軍と、恋のさや当ての中でそこに駆け込んでくるアンリ伯爵の確執が描かれる。そして、エレナの説得を受けたロラン将軍はパリに戻ってクーデターを起こすべく、旅芸人の姿に身を変えて馬車に乗り込むのだが、そんな形でロラン将軍をパリに脱出させるための、いかにもフランス的な芝居が面白い。それは、パルコニーの窓辺に映る、ロラン将軍とエレナとのキスシーン。道路上を埋め尽くして熱狂的な歓迎の声を上げていた民衆がそんな姿を発見すると、たちまち民衆は静かになり、ペアごとにキスと抱擁を交わすことに。

しかして、本作ラストのオチは「フランス人は恋愛好きだ」、「これも文明の一形態」になるほど、なるほど・・・。

2018（平成30）年5月14日記